

2014 年

編 集 後 記

今年度も皆様のご協力を賜り、「環境制御」第 36 号を発刊することができましたことに感謝いたします。本誌では、6 月 7 日に開催し、盛況であった環境管理センター公開講演会「環境と人と化学物質」で講演された先生方の内容を総説としてご紹介させていただきました。皆さんご存じの北野 大先生は実は環境化学の専門家で、化学物質の安全性についてご講演いただきました。東 賢一先生は医学的な視点から健康と化学物質について、また、環境管理センターの川本センター長からは化学物質への暴露とその経路についてご講演いただきました。詳細はこの後にございます総説をご覧ください。

本年、環境制御の編集作業をさせていただきました。原稿を集めるとは当然その原稿に目を通すわけで、普段見過ごしていたかも知れない内容にいろいろ気付かされました。業務報告の排水を見るとわずかですが、ところどころに種々の化学物質が観察されます。実は大学院の講義で学生に説明しているものが多いのですが、こうやって排水として測定すると少し身近な感じがしてきます。排水が規制されている有機塩素化合物（表中でクロロと言う文字を持つ化合物）は、有機化合物中の水素の一部または全部を塩素で置換した合成物質で、炭素と塩素の共有結合が非常に安定しており、また自然界にはほとんどなく、つまり分解者も少ないことから、一時は用途の広い化学物質として、殺虫や材料の洗浄などに使われてきました。しかしながら、長期にわたる残存性と健康に対する負の影響がクローズアップされ、現在は環境中への排出が厳しく制限されています。有用と見られた化学物質も時代と共に使用や排出に制限がかかる場合が多々あり、安全性や危険性に絶対はありません。当事者意識が大切とよく言われますが、実験に携わる身として、化学物質の取り扱いには常に気をつけていきたいと考えています。

最後に、「環境制御」では自然科学、社会科学の両方を含め、環境に関わる幅広い内容の解説、学術論文、技術報告を掲載いたします。皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

環境管理センター 森 也寸志